

空



2014・12

SORA 58号

海の音

柴田 佐知子

豆を煮て水澄む頃と思ひけり

帰還せぬ翼も混じる鱗雲

恋すでに煩のひとつや雁渡し

一粒の白露に身を入れにけり

神鏡の裏は荒ぶる真葛原

抱くものに膝や鬪志や穂絮とぶ

髪切つて柊の花よく匂ふ

寄鍋の湯気越しほどの仲なりし

子が泣いてしまふ雪降る夜の童話

麓より道巻きつけて山眠る

雪女墓のひとつも欲しと言ふ

母の蒲団敷いて畳んで海の音

円柱に触れて廻れば秋の風

夜長し机に肘をついてより

釘抜けば錆びし釘穴雁渡し

炊きあがる飯の匂ひや花八つ手

抱かれゐる子の白息のかすかなり

遅れ来て一礼美しき夜学生

檻の驚すべてを拒み身じろがず

朝の日を家ごと浴びて注連飾る

— 『俳句』十二月号より —

林 檜 高倉 和子

遠 枯 野 中田 みなみ

山のせて終りとしたる松手入

盃を唇にし眺め初衣桁

思ひ出二句

台風の前の青空透き通る

衣ずれの御慶に父の直立す

大花野五体伸びゆく心地して

初旅や抱かせてもらふ赤ん坊

横顔のまま話し出す秋の夜

樟腦の匂ひの動く初運転

さらさらと林檎をむきて頷かず

ほどほどの日差しに睡し冬すみれ

田仕舞の煙に裾野隠れけり

火山灰固く付きたる返り花

鶏頭の触りたくなる硬さとも

遠枯野妙に明るき小雨かな

一人には余る蒲団を干して父

控へめに暮れゆく黄なり石露の花

よろづ屋 荒井千佐代

深秋 服部早苗

まだ空の温みの残る落葉かな

逝く夏やしばし迷路に遊びゐて

秋夕焼ぬぐひ終へたる父母の墓

鳴焼や死を賜るは今がよく

母の忌の過ぐや潮目も秋の色

待宵の影やはらかにエンタシス

風呂敷を畳んで返す椿の実

水に剥ぐ切手いちまい雁来月

よろづ屋の昏きより猫秋の昼

やや寒のソファ―に正座してゐたる

鶺鴒高音漬物樽の逆さ干し

蓑虫庵池になだるる実紫

伊賀上野三句

流木に鷗ひしめき冬どなり

深秋や真筆の軸のぞき見て

秋すだれ夕べの波の尖り来る

土間抜けて風の裏庭破芭蕉

桐一葉 柴田志津子

年 端 だいじみどり

声出せばこもる深井や桐一葉

野の露のかがやいてゐる時刻かな

稲刈つて古墳あまたや怡土郡

どこゆく菊人形の宰府まで

しづけさや銅鏡出でし蜜柑畑

糠床へ塩足す雁の帰る頃

父祖の地を離れず蕎麦の花ざかり

盛り塩のへたばつてをる秋の暮

抛られし芋虫鶏につつかるる

定席は無し新参の夜学生

実柘榴や子を呼んでゐる母のこゑ

路線バス「迂回します」と放生会

間引菜の土ごと届く厨口

菊の鉢山ほど残し逝かれたり

室咲きの花に眼鏡のくもりけり

正月や年端もゆかぬ頃がよし

小鳥来る　　野　上　杏

コスモスや海見るときは立ち上り

誰も手の届かざりしよ烏瓜

長き夜の博多おはじき鶴・鯨

秋小寒手よりこぼるる陀羅尼助

酔にころす背の青き魚十三夜

池干の泥鯉抱きまた転ぶ

曼珠沙華まで畦道を横歩き

片付かぬ机まはりや小鳥来る



糸島 小林 朱 夏

ノラとなる覚悟はあらず冬夕焼

見物の群れが見送る消防車

シャベルもて集めて黒き雪達磨

猫舌の母をからかひ玉子酒

砂浜に今日の足跡初日の出

福岡 田代 貞 枝

夫の手の刻々冷ゆる蝉しぐれ

夫と世を隔てし朝の露の音

野分あと納骨堂の窓明り

笑ふのも泣くのも一人きりぎりす

仏飯を供ふ朝あしたや小鳥来る

粕屋 吉田 葦

神かむいの名山河につけて秋の天

山に生れ山に老いたり鳩を吹く

三代もたてぼうやむや烏瓜

しばらくは水に泳がす八つ頭

折れさうな心に母の林檎汁

福岡 矢野百合子

いくたびも曲がりて訪へり盆の家

刀豆ののたりと垂れて重なりぬ

人込みを水笛くぐる放生会

子沢山授かりさうな新生姜

落葉馳す土を剥がしてゆくやうに

福岡 山内 碧

町内の猫派犬派や葉鶏頭

秋光の海へ大河の蛇行せり

死神を畳みこみたり秋の蚊帳

石路の花老年にもある反抗期

街路樹の幹の捲れや冬に入る

兵庫 戸栗 末廣

桐一葉たましひのごと落ちにけり

らふそくは結界の灯鳥渡る

父の忌の空に残れる榎櫃の実

鯉のひれせはしくそよぐ秋祭

草の絮とぶきつかけのありにけり

糸田 宮井 知英

針のごと刺さる水もて河豚洗ふ

厨房の百燭光や河豚の皮

河豚刺や顔を崩さぬ料理人

河豚汁や海底にある坂越えて

河豚食ぶる後の世のこと言ひ合うて

福岡 樋口 みのぶ

牛の背を撫づれば暑し善光寺

家系図は長き名ばかり式部の実

慰問して泣かれてゐたる赤とんぼ

柚子の実の爪の傷より匂ひたる

百名山百名城や秋深し

福岡 原 友 子

買ひ手来て牛従はぬ秋の暮

今どきの歌聞かされて案山子かな

気合抜けして上出来の干し大根

柚子日和土蔵は老いて傾かず

吊るされて猪大空を凝視せり

山梨 吉 村 摂 護

手術痕撫づる首筋風涼し

永らへて百骸九竅天高し

刈草の匂ひに押され杖を曳く

畦形りに棚田刈りゆく御老人

腕力を誇りし昔吾亦紅

粕屋 秋 千 晴

隣より藁で束ねし菊もらふ

菊の香の仏間に日差し届きたり

育てたる菊に包まれ義母逝けり

線香の匂ひ紅葉へ流れけり

喪の帯を解けば血の引く無月かな

長崎 井 浦 美 佐 子

コスモスに離合のくるま待ちてをり

奥まりし畑の周りはあきざくら

手放すと決めし土地なり大根蒔く

新弟子と向かひ合はせに松手入れ

未枯れの葉も美しく生花展

兵庫 松田 明子

山城の高くありたる良夜かな
篝火と月とが舞台照らしあふ
月天心舞は佳境に入りにつけり
満月や舞台裏より能役者
門の重き御陵や昼の虫

福岡 苑 実 耶

噴煙に町の汚るる秋の入り
明日消ゆる声かもしれぬつくつくし
丈詰めて仏間の菊の水替ふる
手の甲に灸点ひとつ鴟の贅
電線を蹴りて燕の帰りけり

福岡 田岡 千章

二百十日をんなが猫を諭しをり
軒に沿ふチンチン電車花カンナ
鬼蜻蜓超合金の翅を打つ
秋扇畳む明日の予定なし
網鬼灯石の祠の傾ぐまま

福岡 野畑 さゆり

丁寧の新米をとぐ忌日かな
供へたし新米をとぐ音と香を
山国やどの道行くも水澄みて
山を越えトンネルを抜け吾亦紅
山小屋の雑魚寝はるかや鰯雲